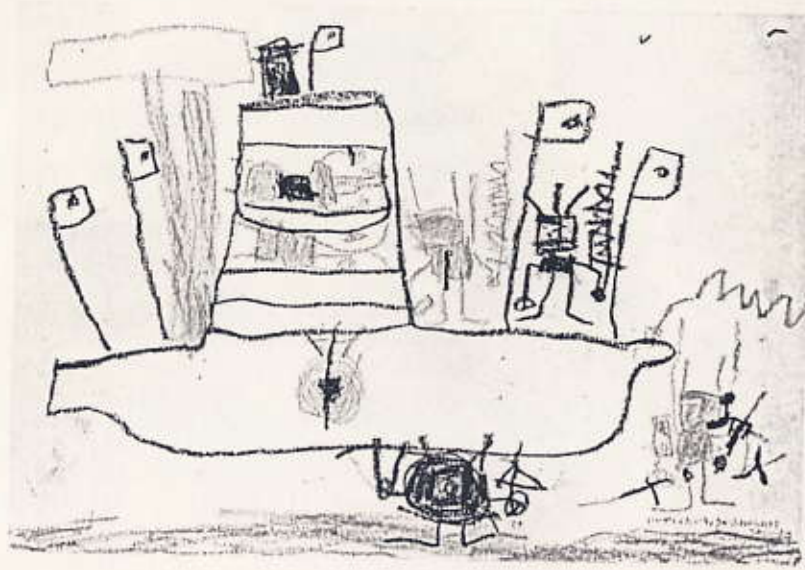


成城教育

第72号 1991年6月20日

特集 1930年代と成城学園



成城学園教育研究所

成城教育

第七十二号

特集 一九三〇年代と成城学園

一九九一年六月二十日

一九九一年六月二十日



成城学園「御真影」問題顛末

田嶋 信雄

「あのし法学部の田嶋ですが、ちよつとつかぬことでお伺いしたいことが……」と私。四月三日の朝のことである。電話の相手は学園事務局の中村管財課長。

「戦前から戦後にかけての物品の記録などはあるのでしょうか……?」

中村さんは当惑しながらも答えてくれた。

「先生、戦前から戦後といつてもね、どういうことなんでしょうか?」

「いや、あの、御真影が一九三六年に成城に贈られて、それが戦争直後まであった筈なんですがね」

「御真影ねえ……」

中村課長はため息をつきながらも調査を約束してくれた。それから待つこと約一時間。私の研究室の電話のべ

ルが鳴り、「再び中村さんの太い声が聞こえる。

「前任者(森田現会計課長)に聞いてみたんですがよく分からないらしいんですよ。地歴館を壊したときに『台』みたいなものがあつたようなんですが、何分昔のことでは台帳があるのかどうか……」

うーむ、そうか。ここで私は二つの情報を得た。まず、中村課長が言つた「『台』みたいなもの」とは、いわゆる「奉安庫」のことで、戦前の日本の学校ではどこでも見られたものである。戦後生まれの私達の世代には実体験としては理解しがたいが、要するに「御真影」、すなわち天皇の写真を奉るために造られた小さい倉庫である。

第二に、その「奉安庫」が、戦後は地歴館にあつたらしい事である。実は、成城の「御真影」は、日本の敗戦

まで図書館に「奉安」されていた。その前後の様子は次のような文章から伺い知ることができる。「ことに書庫の二階は、戦時中に御真影を奉安した場所であつたので、敗戦後は埃のつもるままに放置されていた。」(池田勉「旧い図書館の小さな思い出」、『成城教育』第六八号、一九九〇年六月、九四頁)。すると「奉安庫」は図書館で「埃のつもるままに放置」された後に地歴館に移されたことになる。だが、それにしてもその「奉安庫」の中身、すなわち「御真影」はどこへいつてしまったのだろうか?

私が成城における「御真影」の問題に関心を持ったのは、「成城教育」第六六号に掲載された近藤典彦先生の「成城リベラリズムの高揚期」という文章のなかの次の引用を読んでからである。

「成城にはこれ(奉安庫)がなかった。とうとう押しつけられることになつたらしく、ある晴れた秋の日の午後、旧母の館前の広場に生徒が集められ、ゴシンエイって何だ?なんてガヤガヤしている内に、銅直校長が白手袋に御真影を捧げて、多分文部省の役人らしい人と母の館の階段を上り、生徒達に面した。

そのトタン私としゃべつた。たコこと高松公人が、

全く突然に、マワレーミギノと号令を大きな声でどなつた。全生徒たちはこれに従つてテンチャンの写真にお尻を向けた。……ことわつておくがタコは意識的な反ファツショ分子ではない。ふざけてやつたことはみんなによく分かつていた。しかし成城っ子のリベラルな精神が、こうした不愉快なことに反発して、素直にしかも茶目つ氣たつぷりに表現された事件であつた。

当時の外部から見たら恐るべき勇気のいる行動である。私はこうした成城に驚嘆し共感した。当時意識的な連中、中村雄次郎や高松知英らは担任の山崎先生に心配をかけていたにちがいない。

タコはその山崎先生に付添われて宮城前迄散歩にゆき、ベコンと頭を下げて帰つて来てこの問題はケリになつた」(原文は阿部一郎「私の成城」、『成城学園同窓会だより』第三〇号、所収)

この文章を引用した近藤先生と同様、私もこの文章を読んで感動した。近藤先生御自身は、「成城教育」本号が示しているように、その後、「御真影」問題自体ではなく、いわゆる「成城社研」の歴史へと御関心を向けて行くのだが、私自身は「御真影」問題にこだわりの

気持ちが残る、この問題の周辺をちよつと探ってみようと思つたのである。

「昭和十一年（一九三六）九月、国体明徴がさかんとなつたころ、鍋直勇校長に対し、文部省専門学務局長から御真影奉戴に關しての通牒がきていた。このため、校長は同年九月八日、文部省に出頭、同省事務官より、いままで奉戴していない事情をきかれていた。これに対して校長は、本校はいまだ本建築ができておらず、故に申請を見合わせていた旨を答え、なお理事会にはかつて、本年中には御好意にそうようにしたい旨申して帰つた、と財團理事会で報告している。結局、御真影は昭和十一年十二月十二日に下賜された。奉戴して全学園児童、生徒、職員は堵列してこれを迎え、「母の館」で奉戴式をおこない、図書館の二階に奉安した。それ以来、学園教職員は、順番に学園内で宿直をすることになって、それを実施した。」（『成城学園五〇年』一四六頁）

ここで「御真影」下賜が「十二月十二日」とされているのは「十二月二十一日」の誤りである。このミスは、私の考えでは、仲原善忠述「成城学園二十五年史稿」九五―九六頁での記述の誤りがその後そのまま踏襲され

たことによる。しかし、それはともかく、この「成城学園五〇年」の記述は、管見によれば、「御真影」問題に關する限り、最も詳しい。そこで、私は、この記述をもとに調査を進めることにした。

まず、なぜ、一九三六年（昭和十一年）という時点で文部省から成城に「御真影」を掲げるように圧力がかつたのであろうか。この疑問に答えるには、日本の教育史における「御真影」問題の歴史を若干振り返って見る必要がある。

「御真影」が全国の学校に普及する契機となつたのは、成城で「御真影」が問題となるのは四〇数年前の一八九〇年（明治二十三年）八月、文部省から宮内省に宛てて出された次の要請である。

「兩陛下御写真之儀、〔中略〕三大節等に於て職員生徒をして崇拜せしめ忠君愛國の志氣を涵養するは教育上極めて必要の儀にして、其薫陶は幼稚教育の時に於て最も効驗有之儀に付、今高等小学校のみに限らず市町村立各小学校幼稚園に至るまで御真影拝戴願出候向へは下賜せられ、職員生徒をして崇拜せしめ忠君愛國の志氣を涵養せしめ候様致度」

ヒトラーやスターリンや毛沢東の例を思い出すまでもなく、國家の政治的・精神的指導者の写真ないし肖像画を國民に崇拜させるのは、國家建設をめざす政治指導層にとつて常にもつとも有効な手段である。明治日本の政治的・イデオロギー的統合を不可避の課題とする政府・文部省にとつて、「御真影」は恰好の手段と考えられた事がこの引用によつても確認できる。

その後「御真影」は「奉安殿」などの準備の整つた学校から順次「下賜」され、日本の津々浦々にまで普及していった。そのなかで、多くの教師達が、「御真影」を天災から守るため、命さえ落としてしまうという悲劇がしばしば起こっている。しかし、それはともかく、「御真影下賜」は、理念的には「強制」ではなく、あくまで各学校による自発的な「下賜願ひ」に基づくものであつたから、とりわけミッション系私学を中心に、「御真影」を「奉戴」しない学校が残るのは当然の成り行きであつた。

文部省がこのような自発的「下賜願ひ」のタテマエを放棄し、実質的な「御真影」強制へと向うのが一九三〇年代、とりわけその後半である。この時期の日本現代史は、「一五年戦争」の時代と呼ばれることが多い。一九

三一年に關東軍の謀略により、「満州事変」が勃発して以來、一九四五年の日本の敗戦まで、日本が中国と戦火を交えなかつた年はほとんどない。たとえば、成城「御真影事件」の前年、一九三五年には支那派遣軍を中心に華北に「第二満州国」の建設を画策する「華北分離工作」が進展し、三六年には蒙古に傀儡政権樹立をめざす關東軍の「綏遠事件」が勃発している。翌三七年には、いまでもなく、盧溝橋事件をきっかけに、日中全面戦争が始まる。

国内的にも日本は暗い時代へとつき進んで行く。三五年にはいわゆる「国体明徴運動」が起こり、美濃部達吉の憲法理論への攻撃に見られるように、共產主義・社会主義運動及びその思想のみならず、リベラルな思想さえもが弾圧の対象となつて行く。翌三六年には陸軍青年將校及び皇道派によるクーデターⅡ・二六事件の勃発。

こうした国際・国内政治社会状況のなかで、学校教育にも次々と國家統制が加えられていくことになる。成城学園「御真影」事件もまさしくこのようなキナ臭い脈絡のなかで起こつたものだった。

ここで再び「成城学園五〇年」の記述にたち返つてみ

よう。「昭和十一年（一九三六）九月、国体明徴がさかんとなったころ、銅直勇校長に対し、文部省専門学務局長から御真影奉戴に關しての通牒がきていた。このため、校長は同年九月八日、文部省に出頭、同省事務官より、いままですでに奉戴していない事情をきかれています。」

銅直校長を呼びつけたのは「文部省専門学務局長」ではなく、それとは別の「文部省学務局長」だったという説もあるが（『成城学園六〇年』二四三頁）、当時の文部省の職制を考えるとおそらく専門学務局長が正しい。そこで私は、手元にある「戦前期日本官僚制の制度・組織・人事」により当時の文部省専門学務局長が誰であったかを調べてみた。そして一瞬、あつと息を飲んだ。

その男の名前は伊東延吉。当時、文部省内で、専門学務局長とともに、思想局長も兼任（三四年六月一日—三七年六月七日）していた官僚である。後に文部次官まで昇りつめ、一九三〇年代の文部省の国家主義的思想統制政策を第一線でリードした男といつてよいだろう。

そもそも伊東の兼務した「思想局」とは成城「御真影事件」のほぼ二年前、昭和九年六月一日に伊東局長のもとに設置されたもので、その業務は、「学校及社会教育

団体ニ於ケル思想上ノ指導・監督及調査、ソノ他思想上ノ指導及調査」という、おどろおどろしいものであった。また、伊東は、のちに、国民精神文化研究所、教学練成所という、天皇制イデオロギーのいわば「理論センター」ともいふべき機関を先頭に立つて指導しているのである。実は私は、今回の「成城教育」の特集にあたり、前田一男先生の「国民精神文化研究所の研究」という論文を読んでいたためこの伊東延吉という男の名前を知っていたのだが、その男が「成城御真影事件」にも関係していたのだ。私があつと息を飲んだ理由もここにある。

そこで、いま伊東の考えの概略を簡単に把握するため、「教育週報」の見出しから伊東の発言の断片を追ってみよう。まず「何故に高等教育は赤い学生を生む？」（四二四号）という危機意識のもとに、伊東は、「マルクス批判力——文部省の方針」（二四四号）と題してマルクス主義にたいするイデオロギー的対決の方針を示す。伊東によれば、「学生」の思想運動、ますます「潜行」（四三九号）という有様であったが、その後「赤化問題は下火」になったとして、文部省は、次には目標を拡大し、「日本精神徹底を強調」（五二九号）するようになる。このような情勢判断のもとに、国民精神文化研究所長と

なった伊東は、「今後の努力は左傾対策のみでない」として、単に左翼思想の取り締まりのみならず、社会生活のあらゆる領域に、いわばイデオロギー的な「眼み」を効かせようと試みるに至るのである。一九三〇年代後半、「自発的下賜願い」のタチマエをかなぐり捨てつつ、いまだに「御真影」のない学校にその「奉戴」を強制していく背景には、伊東に代表される文部省のこのような認識が存在しているのである。

次に私は、成城「御真影」事件に關する公文書が關係官庁に残っているかどうか調査してみることにした。通常、「御真影」の下賜は、手順としては、府県立学校ではその地方長官が、市町村立学校では市町村長が、私立学校ではその代表者が、總じてその設立者が地方長官および文部省を介して、宮内大臣宛に下賜の請願を行うことによつてなされる。したがって、成城からの「御真影」下賜願いは、先ず東京府に出され、それがさらに文部省から宮内省へ伝達された筈である。そこで私は、浜松町駅から海に向かつて徒歩五分の所にある東京都公文書館に行つてみた。ここで東京府学務部の文書を探そうという訳である。その結果、いわゆる「成城事件」關係の書

類は多く出てきたが、残念ながら「御真影」關係文書は発見出来なかった。「御真影」は、学則変更などの学務とは直接關わらないから、学務部には書類は残らなかったのかもしれない。

そこで、次の順序としては文部省であろう。しかし文部省の文書は、その多くが日本の敗戦時に湮滅されたとされている。一五年戦争期の日本政治史の中でも、文部省の研究は、他の省庁、例えば軍部や外務省、あるいは大蔵省などの研究に比べ、かなり立ち遅れた分野といつてよい。関連の研究論文などをしばらく検討したのち、私は文部省文書の発掘を断念せざるを得なかった。

すると最後は宮内省史料のみが残ることになる。「宮内省史料か……」と私はため息をついた。宮内省史料は恐らく戦後も湮滅はされなかったであろう。それは今も宮内庁の奥深く眠っているに違いない。しかし多分それは二度と目の目を見ることはないだろう。とりわけ「御真影」などという、権力の重要なイデオロギー上の儀式に關わる文書ならなおさら……。皇居の堀は広く深いように思われた。

ビールを飲みながらそんな思いを研究仲間にしやべつていっているうちに、意外な道が開けてきた。その友人は宮内

庁の書陵部という所に知人がおり、一応あたって見たら良いと勧めてくれたのである。私は気が重かったが、とにかく電話だけでもかけてみることにした。

宮内庁書陵部のK氏は、私の話を一通り聞いたのち、次のように答えた。「それは恐らく公文書でしょう。しかし、原則的に公文書は非公開です。」それはそうだろうな、と私は思った。戦前の宮中関係の文書など開示し始めたなら世の中大変なことになる。成城「御真影」関係の公文書発掘は諦めるしかないか。と思った時、K氏が続けた。「でも、ごく例外的に、すでにマイクロフィルムに収められている文書であれば、マイクロからの焼きつけが可能なこともあります。」そしてK氏は調査を約束してくれた。

あったのである。K氏の調査によれば、他の二十数校と並んで、成城の学園名も記された文部省文書が、一九三六年に宮内省に届けられており、その文書がマイクロ化されているとの事であった。K氏は、宮内庁書陵部出入りのコピー会社を通じて、書類のコピーが私に届くよう手配してくれた。しかし、残念なことに、そのコピーが届く前に、この原稿の締切がきてしまった。この文書の紹介は他日を期したい。

ところで、「御真影」を強制された成城側の反応の一端は「テンチャンの写真にお尻を向けた」学生の態度によく示されている。また、「成城学園六〇年」には、「全校で御真影を奉戴し、学園図書館の二階に奉安したが、終戦までそこに安置し、一応の礼を尽くした(二四三頁)」とあり、「御真影」への「一応の」距離感が表現されている。それらを成城リベラリズムの現れと解釈する向きもあろう。しかし、「あまり胸を張れたものでもない」というのが私の率直な感想である。とりわけ、同じように一九三〇年代後半に「御真影」を強制された、例えば東洋英和の、次のような苦悩に接する時、その感を深くするのである。「一九三五年(昭和一〇)年二月、ご真影をなぜ奉戴しないかと、文部省から照会をうけて、この問題への対応が急遽協議された。これは教育の本質にかかわる大問題であったから……」。「時代の流れは大きく変化し、東洋英和の教育やその持つ雰囲気は白眼視されてきたのである。ご真影奉戴は一九三八(昭和一三)年から具体的な問題となり、……受入れる方向で処理せざるを得なくなり、幹部会(評議員会)は同年九月受入れを決断した。」(「東洋英和百年史」三三二―三三三頁。)

(後記 小論を書くに当たっては多くの方々の貴重な御教示・御協力を戴いた。お名前を記さなかった方々を含め、謝意を表したい。しかし、時間の関係で、御教示の多くは小論の中に活かすことが出来なかった。他日を期したいと思う。)

後日談を少し。敗戦直後、文部省は通達を出し、天皇の「制服」(ノ)が変わったことを理由に「御真影」を回収し、市町村レベルで極秘裡に焼却処分させている。しかし成城ではどうなのか。文部省通達は、場合によっては、成城まで徹底しなかったかもしれない。私は中村管財課長の電話を受けた後、今度は前任者の森田現会計課長にお話を伺うことにした。森田課長によれば、かつて地蔵館を壊す時、「学園の大王の高野さん」という方が、「これはぞんざいにあつかってはいけない」と言って「台」を倉庫にしまったらしいとの事である。加えて森田課長は、現学園本部裏の倉庫及び母の館の下にある倉庫の調査を手配してくれた。現在その調査の半分が終わったところであるが、肝心の「もの」はまだ「発見」されていない。残り半分の中に、もしかしたら「ある」のかも知れない。

もう一つ。前に記したように、「御真影」下賜に伴い、成城では宿直制が導入されている。この制度は戦後も一部は日直制として残り、全成城学園教職員組合の要求により廃止されたのはつい最近の事である。「御真影」は意外としぶとく我々の生活に関わっていたことになる。

(たじま・のぶお 法学部)

